

鮑照の對句表現をめぐる一考察

向島 成美

言葉を相互に對應させつつ二句を構成する、いわゆる對句表現が、中國古典詩文の世界において最も重要な修辭技法となつてゐることは、ほとんど疑いを容れる餘地のない事實といつてよいだらう。むしろ對句表現は、中國の詩文にのみ見られる獨自の修辭技法というわけのものではなく、日本にもあれば、西洋にもある。恐らくは世界のどの國の言語表現をとつてみても、ほぼ普遍的にこの修辭技法は存在してゐよう。しかし中國の場合は、單音節であり、孤立語的である中國語そのものが本來的に對句表現に向う性格を持つていたこと¹⁾や、さらには中國の人々が古來相對的な思考法を好んだこと²⁾などが與つて、質量ともに地に類例を見ないほどの對句表現を生み出した。

そこで先ずは中國の對句表現の歴史をこく掻い摘まんで見ておくならば、中國では最も初期の文獻からしてすでに對句表現が現われてゐる。たとえば韻文の最も初期のものは、いふまでもなく『詩經』であるが、この中には、

（禮禮其陰 禮禮として其れ陰り）
（融融其雷 融融として其れ雷す）（邶風「終風」）

秩秩斯干 秩秩たる斯の干
幽幽南山 幽幽たる南の山（小雅「斯干」）
などの例を容易に見出すことができる。これらの例を見ると、疊語を重ねたり、「其」の同字を重ねたりするところなどが、後世の洗練された對句表現と比べるとまだ素材であるといわざるを得ないけれども、對句としての基本的要件は十分に満たされている。

その後、先秦諸子の散文においても、強調を旨とする雄辯術との關りで、對句表現が着實な發展を遂げている跡を認め得るし、また韻文の方では「楚辭」の登場によつて、對句表現の文學的効果を引き出すべく新たな工夫が加えられて行く³⁾。

采薜荔兮水中 薜荔を水中に採り
搴芙蓉兮木末 芙蓉を木末に擧る

（九歌「湘君」）
朝飲木蘭之墜露（兮）朝には木蘭の墜露を飲み
夕餐秋菊之落英 夕には秋菊の落英を餐ふ

對句表現が文學表現として持つ最大の効果は、二句が單純な意味の反復や羅列に止まらず、二句たがいの意味を響かせ合うことによつ

（離騷）

て、より大きな意味の世界を端的に獲得して行く點にこそ認めるべきであろうが、「楚辭」の對句には確かにそうした効果が意識されている。たとえば後者の例の場合、朝に木蘭から滴り落ちる露を飲むことと、夕に秋菊の散り落ちる花を食うこととを並列させることによつて、絶えず高潔な生活を送るという意味合いを付加的に提示するがごくくじである。

「楚辭」によつて對句表現の持つ文學の修辭としての有効性が自覺され出すと、やがてこの「楚辭」を受け繼いで起つてきた漢の賦の作家たちも好んで對句表現を用いた。司馬相如や揚雄ら漢代賦作家の作品を一見すれば明らかのように、漢の賦こそは對象を多彩に描き出すべく、敷陳の手法をもつて對句表現を頻用する文學形式なのであつて、むしろ對句表現を缺いては賦の形式そのものが成立し得ないほどである。

ところが、漢の賦がすでに大量に使用していた對句表現は、そのまま直ちに詩の世界に進出することはなかつたようである。後漢時代の作と推定される『文選』所收の「古詩十九首」の場合を見ると、全く對句表現を用いないものが半数以上を占めるし、また對句表現を用いているものでも、それが詩全體で占める割合はごく僅かではない。しかも「古詩十九首」の對句表現は、

青青河畔青 青青たる河畔の草

鬱鬱園中柳 鬱鬱たる園中の柳(其二)

のように疊語を對應させるものか、もしくはは

去者日以疎

生者日以親 去る者は日に以て疎く 生る者は日に以て親し(其十四)

のように對應する位置に同一の文字を重ねるものが目立つたのであつ

て、基本的には『詩經』と同じ趣向の素朴な段階に止まっている。そして五言詩が詩形として定着した建安時代の曹植(一九一—二三〇)ら、さらには魏の正始時代の阮籍(二一〇—二六三)らに至ると、さすがに「古詩十九首」のような素朴な對句表現は影を潜めてくるものの、對句表現の使用の度合いについていふならば、依然としてまださほど目立つことはない。

賦が開拓した對句表現を詩がその修辭技法として大きく取り入れて行くのは、三世紀末の西晉太康時代の詩人たちからである。中でも六朝詩の對句形成史の上で注目すべきは陸機(二六一—三〇三)であるが、高木正一氏の調査によれば、陸機の全詩句に占める對句の割合は、三分の一を超えている。また二句の對應する位置に同字を重ねるような素朴な對句表現は、曹植においてもすでに忌避される傾向にあったのだが、陸機になると一層それが徹底されているなど、全體として對句表現の質的練度の度も深められたといえる。

西晉太康期の陸機らによつて詩の修辭に大きく組み入れられた對句表現は、その後、六朝宋の元嘉期の詩人、謝靈運(三八五—四三三)の登場によつて、さらなる量的擴大とともに、質的にも様々な工夫が加えられて行く。これも高木氏の調査によれば、謝靈運の對句の使用頻度は、實に全詩句の六割を超える状態にまで達しており、作品によつては全篇のほとんどが對句で構成されているものも稀ではない。さらにその技巧も、双聲語と疊韻語の對、色彩語の對、數字の對、視覺と聽覺との對など、多彩な對句表現が驅使されてくる。「康樂は風神華暢にして天授を得るに似たり。而して駢儷已に極まる」とは、明の胡應麟が『詩藪』内編卷二で述べた謝靈運評であるが、謝靈運の對句表現は確かに六朝詩の對句の一頂點を極めた感がある。こうして六朝

詩は、對句表現全盛の時代を迎えることになった。そしてこの六朝詩の對句を基礎として唐の律詩の對句が生まれてくるわけであり、唐の律詩の對句に至って中國の對句表現が文學の修辭技法としての完成を見せたのは、よく知られるところであろう。

さて私がここに取り上げようとするのは、六朝宋の鮑照(四一四—四六〇)の對句表現である。鮑照は、漢魏の古詩、あるいは曹植、阮籍、陸機、陶潛ら前代の主だった詩人の作風をよく繼承しているという點では、それ以前の詩の集大成者としての性格を持つし、一方、次代の齊梁詩の端緒を開く作品を残したという點では、時代の先驅者としての性格も併せ持った詩人である。そうした意味において、漢魏六朝詩の展開を見る上できわめて重要な位置を占める詩人といつてよい。そして「楚辭」が文學表現としての對句の道を開いて以降、唐の律詩によって對句表現が完成されるまでの中國の對句形成史から見た場合、詩に對句表現を定着させた陸機、さらには山水の描寫を通して對句表現を量的、質的に大きく前進させたと考えられる謝靈運の後を承けて、鮑照の目指したものが何であつたのかは、十分に検討に値することであらう。

そこで鮑照の對句表現を具體的に検討するのに先立って、まずはその前提となるべき漢魏六朝詩の對句表現一般の性格を見るところから論を進めたい。

二

中國の對句表現が唐の律詩の出現によって、文學の修辭技法として完成の域に達したことは、すでに述べた通りであるが、その律詩の對句を成り立たせるための要件としては、普通次の四點が考えられる。

①二句の文字數、延いては音節數が等量であること。
②二句が文法構造の上で同一の形をとり、かつ對應する位置にあるそれぞれ語が同一の品詞であること。

③二句の對應する位置にある語が、意味的に何らかの關連をもつて統合され得る要素を有していること。

④二句の平仄が整えられていること。

しかしここで取り上げようとする漢魏六朝詩の對句の場合は、律詩の對句とは自ら性格を異にする。その兩者の相違の最も大きな點は、いうまでもなく④である。周知の通り、唐代に至って律詩を中心とする近體詩が成立すると、平仄は近體詩の韻律を支える重要な柱となるものであるから、當然律詩の對句についても平仄を整えることが必須の要件として求められる。漢魏六朝詩の場合は、詩の韻律に意識的に工夫が凝らされるようになった齊の永明期の頃から、近體詩の平仄の萌芽となるようなものが現れ始めるけれども、全體として見れば、漢魏六朝詩の對句にとつて平仄は必須の要件になり得ない。

従つて漢魏六朝詩の對句を考えるには、律詩の對句の四つの要件のうち、④を除いた①②③を見ることになるわけであるが、そのうち①は問題がないにしても、②と③についてはやはり注意を要するようである。それは、簡単にいえば、漢魏六朝詩の對句は語法面においても、意味面においても、律詩の對句ほどには二句それぞれの語の對應が嚴密に行われていない場合が多いということである。

たとえば王力氏は、『漢語詩律學』の第三十三節「古體詩的對仗」において、律詩の對句表現が「工」を求めるのに對して、古風(ここでは唐代の古體詩をいう)の對句表現は「拙」を求めるとするのであるが、その「拙」の具體的内容として指摘されている事柄を見ると、②

と③の要件から外れるものであって、しかもそれは漢魏六朝詩の對句ではごく普通に行われているものばかりである。王力氏が古風の「拙對」の例として掲げるものには、たとえば次のようなものがある。

鷺鳥立寒木 鷺鳥は寒木に立ち
丈夫佩吳鉤 丈夫は吳鉤を佩ぶ

(王昌齡「九江口作」)

これは「鷺鳥」と「丈夫」、「寒」と「吳」が意味的に揃っていないところが「拙」であって、③の要件が満たされていない例である。

衣冠半是征戰士 衣冠半ばは是れ征戰の士
窮儒浪作林泉民 窮儒浪りに作る林泉の民

(李白「少年行」)

この場合は、「衣冠」が并列關係の連語であるのに對して、「窮儒」の方は主從關係の連語となっていて、②の要件を満たしていない點に不十分さが残る「拙對」の例となる。

以上の二例は、意味的、語法的に對應が不十分な語をむりやりに對に仕立て上げたものであるが、王力氏が古風の「拙對」として指摘するものには、さらにいくつかの形がある。

湘水流入海 湘水流れて海に入る
楚雲千里心 楚雲 千里の心

(常建「潭州留別」)

これは「湘水」と「楚雲」の部分のみが對になっいて、残りの部分は全く對になっていない、すなわち句中の一部の語のみに對の意識が働いているものである。

五陵豪貴反顛倒 五陵の豪貴反って顛倒
鄉里小兒狐白裘 鄉里の小兒 狐白裘

鮑照の對句表現めぐる一考察

(杜甫「錦樹行」)
これは王力氏が「拙中の拙」と述べるものであるが、意味的には確かに對になっているものの、語のレベルで見た場合、對句としての配慮がなされていないものである。

このように見てみると、唐代の古體詩の對句表現は、律詩の對句表現とは異なる古拙さを出さんがために、律詩の對句に求められるような嚴密さを無視したところで行われていることが見てとれる。そして漢魏六朝詩の對句表現の現實も、このような唐代古體詩の對句表現の狀況と一致することがしばしばである。従って漢魏六朝詩を對象にして對句の考察を進めるには、唐代古體詩の對句の場合と同様に、律詩の對句とは別の基準で見ることが必要になるわけであるが、その基準を具體的に示すことはなかなか困難といわなければならない。漢魏六朝詩も後半のものになると、精密さの點で律詩の對句と比べて全く遜色のない對句が現われている一方、王力氏が「拙對」の例として擧げているもののように、句全體としては對句の體をとっていないものの、部分的には確かに對偶意識が働いていると考えられるものも漢魏六朝詩には存在する。たとえばわが國の空海によってまとめられた『文鏡秘府論』東卷の「二十九種對」は、漢魏六朝詩の對句の例を數多く含むのであるが、その「二十九種對」中の「第十一、意對」、「第二十三、偏對」などは正しくそうした不十分な對句の典型である。こうしたのもまでも對句の範圍に含めるとなると、對句の範圍は著しく廣がってしまふであらう。しかし漢魏六朝詩の對句が、精確さまざまな段階のものを含みつつ展開しているという事情を踏まえるならば、その範圍にあまり嚴密な枠を設定すべきではない。たとえ部分的であるにせよ、對偶意識の感じられるものは、對句考察の對象に加えるの

が妥當と考えられる。

以上のことを前提として、次に鮑照の對句表現を見ることにする。

三

鮑照の對句の特色としてすでに指摘されていることの二つに、二句の距離が甚だしいということがある。そのことの指摘は網祐次氏が『中國中世文學研究』¹⁰⁾において鮑照の敘景詩を論じられた部分に見えるのであるが、その具體例として挙げられているのは次の作である。

登廬山二首其一

- I 懸裝亂水區 裝を懸けて水區を亂り
- 薄旅次山楹 薄か旅して山楹に次る
- II 千巖盛阻積 千巖 盛んに阻積し
- 萬壑勢迴繁 萬壑 勢しく迴繁す
- II 龍從高昔貌 龍從たること昔貌より高く
- 紛亂襲前名 紛亂たること前名を襲ぐ
- IV 洞澗窺地脈 洞澗は地脈を窺い
- 聳樹隱天經 聳樹は天經を隠す
- V 松磴上迷密 松磴 上に迷密にして
- 雲竇下縱橫 雲竇 下に縱横たり
- V 陰冰實夏結 陰冰は實に夏に結び
- 炎樹信冬榮 炎樹は信に冬に榮く
- VI 嘈噴晨鷓思 嘈噴として晨鷓は思ひ
- 叫嘯夜援清 叫嘯として夜援は清し
- VII 深崖伏化迹 深崖は化迹に伏し
- 穹岫闕長靈 穹岫は長靈を闕す

- X 乘此樂山性 此の山を樂しむ性に乘じ
- X 重以遠遊情 重ぬるに遠遊の情を以てす
- X 方躋羽人途 方に羽人の途に躋り
- X 永與煙霧并 永く煙霧と并ばん

〔鮑氏集〕卷八

この詩は、元嘉十六年(四三九)から翌十七年にかけて、鮑照が江州刺史、臨川王劉義慶に國侍郎として仕えていた時期の作と推定されるものであり、現存する鮑照の作品中ではごく初期の作に屬する。最後のX聯を除く他の聯は、中にやや不完全なものを含むとはいえず、全て對句表現によって構成されており、特に中間部分で廬山の景を多彩に描き出すあたりは、鮑照山水詩の典型といつてよい。

この詩で網氏が二句の距離の甚しい例として挙げられるのは、V聯の「洞澗」と「聳樹」、V聯の「松磴」と「雲竇」、V聯の「陰冰」と「炎樹」である。「洞澗」は、洞穴を覗き込むかのように奥深くに望まれる谷川、「聳樹」は、高く聳え立つ樹木を意味しよう。「澗」と「樹」の對比や、さらにはそれらの修飾語となる「洞」と「聳」の對比は、意味的に統合される要素を確保しつつも、通常の對句の言語感覚をこえた廣がりを感じさせる。「松磴」は、松林の中に續く石の坂道、「雲竇」は、雲の湧き出す洞穴、「陰冰」は、目かげに結ぶ氷、「炎樹」は、燃えたつように盛んな南國の木をいうのであろう。それらは、前の「洞澗」「聳樹」をも含めて、全て熟語自體が鮑照以前の用例を見出せない極めて特異な用語であるのだが、それぞれの語の對比もまた凡庸ではなく、他に類例を見出し難いものである。そうした意味において、鮑照の對句に距離感の甚だしさを認めた網氏の説は、確かに首肯すべきものと思われる。

ところでこれまで網氏の用語そのままに二句の距離感という言葉を借用してきたのであるが、對句における二句の距離感とはそもそもどのようなことであるのか、またあくまでも相對的なものでしかあり得ない、距離の大小は何を基準として計ることができるのか、そのことが改めて吟味すべき課題としてあるだろう。このことは、文學表現としての對句そのものの本質に關わる問題を内包していると考えられる。従つてこれまでの對句をめぐる議論の中にも二句の對應する語の關係を述べるものが多い。中國の現存する資料の中で最も早く對句について論及するものは、鮑照の約五十年後輩に當る六朝梁の劉勰(四六六—五二〇?)が著した『文心雕龍』麗辭篇であるが、その中で劉勰は對句を四種に分類して次のごとくに説く。

故に麗辭の體は、凡そ四對有り。言對を易しと爲し、事對を難しと爲し、反對を優れりと爲し、正對を劣れりと爲す。言對なる者は、空辭を雙比する者なり。事對なる者は、人驗を並舉する者なり。反對なる者は、理殊なりて趣合する者なり。正對なる者は、事異つて義同じき者なり。(故麗辭之體、凡有四對、言對爲易、事對爲難、反對爲優、正對爲劣、言對者、雙比空辭者也、事對者、並舉人驗者也、反對者、理殊趣合者也、正對者、事異義同者也)

ここに擧げられる四種の對句のうち、前の二者、すなわち「言對」と「事對」は、對句が典故を含むか否かによつて立てられたものである。「空辭(抽象的言辭)」を雙比する「言對が典故を持たず、「人驗(古人の事跡)」を並舉する「事對が典故を持つものであることはいうまでもない。また残る二つの「反對」「正對」については、「反對」は「理(道理)」の異なりを持ちながらも「趣(趣旨)」が合致するもの、「正

對」は「事(現された事柄)」にこそ違いはあるものの結局「義(意味)」の上で同一のものと説かれる。これは、劉勰が具體的に示す例句やその説明などから判断すると、「反對」は二句のうちに對立的概念が含まれるが故に「反」、「正對」は對立的概念が含まれないが故に「正」なのであって、要するに「反對」と「正對」は、二句のうちに對立的概念が含まれるか否かを基準として設定された對句分類であつたと考えられる。

このように「言對」と「事對」が典故の有無によつて設定され、「反對」と「正對」が對立的概念の有無によつて設定されているとなると、劉勰の對句四分類は相異なる二つの基準によつて立てられた二組の對句分類を合わせたものといふことになるわけであるが、劉勰がこの四分類の次に、「又た以ふに事對には、各々反正有り、類を指して求むれば萬條自ら昭然たり。」と述べるあたりから察すると、「反對」「正對」がより上位の分類として意識されていたのではなかつたらうか。つまりは、「反對」と「正對」が對句のあらゆる事態を包攝する二元論的な區分として考えられていたといふことである。

では劉勰のいう「反對」「正對」がそのまま對句二句間の距離の問題に直結するのかわかると、必ずしもそうはなるまい。確かに一般的にいえば、「反對」が「正對」に比べてより距離感を感じさせるものがあるにせよ、「反對」「正對」は並列された二者の關係を對立的概念の有無の點で二大別したのであって、相對的な距離を問題にしたものではないからである。二句の距離という觀點から劉勰の對句論を見ると、前述の對句四分類に續けて劉勰のいう「對句の駢枝」の論が注目される。「對句の駢枝」とは、無意味な對句を意味する。劉勰のいうそれは、

遊雁比翼翔 遊雁は翼を比べて翔り
 歸鴻知接翮 歸鴻は翮を接するを知る

(張華「雜詩」)

のように、二句がともに大鳥の並んで飛ぶことをうたい、内容の「重出」する對句である。嚴密にいえば、およそ言葉は表現が異なれば全く内容が重なることはあり得ない筈であるが、ここで劉勰が言わんとしたところは、一句のみで十分に傳達可能な内容をことさらに二句に引き延ばしたのでは、對句の意味がないということだったろう。このような内容の「重出」する對句は、後世「合掌對」と呼ばれ、對句表現で最も忌避すべきものとされる。そしてこの「合掌對」こそが、二句の距離が皆無とまではいわないまでも、極端に近い場合と考えられるのである。

劉勰の一連の對句分類の考え方からすると、「合掌對」は「正對」のうちでも二句の距離が極端に接近したものであり、「反對」は「合掌對」から背馳する方向のものと意識されているのではあるが、劉勰はそれ以上のことはいふ述べていない。そこで劉勰の論から離れて、對句二句間の距離の問題を念頭に置きつつ、他の對句論に目を轉じてみると、前にも少し觸れた空海の『文鏡秘府論』東卷に引かれる「二十九種對」が浮かび上ってくる。

『文鏡秘府論』の「二十九種」は、空海が中國で得た對句文獻に基づき、「第一、的名對」以下「第二十九、總不對對」に至るまで、種々の對句を網羅的に列擧したものであるのだが、その中で當面の問題に關わるものを抽出するならば、「第一、的名對」、「第六、異類對」、「第十一、意對」などが擧げられる。

最初の「的名對」は、掲げられている例句や、その解説から判断す

ると、「東」「西」や「天」「地」のような對照、對立的な概念であるうと、あるいは「金」「玉」や「鮮」「艶」のような類似の概念であろうと、ともかくも對應關係が最も明確な形で提示されている對句をいうようである。従つて「的名對」は、『文心雕龍』のいう「反對」「正對」とは全く異なる基準で立てられているのであり、むしろ範疇の同一性が基準になっていると考えられる。これに對して「異類對」は、「上句に天を安んじて、下句に山を安んじ、上句に鳥を安んじて、下句に花を安んじ、上句に風を安んじて、下句に樹を安んず。此くの如きの類を、名づけて異類對と爲す。是れ的名對に非ずして、異同比類す。故に異類對と言ふ。」と説かれるように、文字通り類の異なる語を對比させたものであつて、「的名對」に比べると、對應する概念の範疇をより廣くとしたものといえる。また「意對」については、これもその例句と解説を見ると、「歲暮」「涼風」、「寢興」「白露」のように、語としては不揃いであるにも關らず、二句が意味的に對應關係を保っているものをいう。そうすると「意對」も對比される語は範疇としては著しい廣がりを持つことになるのである。

「的名對」は、範疇の同一性を厳しく求めるが故に、均衡のとれた語が對比されることになり、それだけ人に安定感を與えるであろうが、逆にいえば對比された語は人の連想を誘ひ易いものになりがちであつて、新味に乏しいものとなる。一方、「異類對」や「意對」の場合、範疇を廣くとるが故に、人の意表をつく表現が可能となり、凡庸さを突き抜けたより高度な詩的表現が期待できる。『文鏡秘府論』が「異類對」の項で指摘する「但だ此くの如き對は、益々詩に功有り」は、まさしくこのことをいうものだったろう。そして前述の對句二句間の距離感の問題も、歸するところはこの「的名對」と「異類

對「意對」の關係に重つてくるといふ。二句間の距離に隔たりを感じさせない對句とは、二句の對應關係が自然に保たれていることを意味しようが、それは他ならぬ「的名對」の性格そのものである。また前に見た鮑照「登廬山」詩の對句のように、對比される語が著るしい距離感を感じさせるのは、それぞれの語が常識的な範疇を越える形で並立しているからであつて、この場合などはちょうど「異類對」「意對」の性格に付合していると考えられるのである。

以上、對句二句間の距離感の問題を考えるために、やや遠回りの道をとりながら、『文心雕龍』と『文鏡秘府論』の對句論を見てきた。

『文心雕龍』は六朝齊末に著わされているから、鮑照からもそう遠くはない時期のものである。『文鏡秘府論』は空海の撰ではあるが、東卷「二十九種對」の最初の十一種は「古人同じく斯の對を出す」とあるように、中國の先人の著作をとりまとめたものと考えられる。與膳宏氏の考證によれば、この十一種は『文筆式』を主な典據としており、その『文筆式』は撰者は不明であるが、隋から唐のごく初期に成立した可能性が高いとされる。つまりはこの書も六朝の作品を對象とするものなのである。これらの書の所説は、あるいは間接的であるにせよ、六朝詩人の對句意識を反映していると考えられるだけに、その持つ意義は大きい。

ところで、對句二句間の距離感の問題を考えるには、いま一つ残された課題がある。それは、さまざまな對句の中でも最も基本的な對句と考えられる「的名對」の場合、二者の對比が自然な對應關係をなす意識されるための認識の枠組、また言い換れば「異類對」でいうところの類別の基準についての検討である。そこで次には、この點への検討を加えつつ、鮑照の對句の實態に照らし合わせて見てみたい。

四

中國には古來、百科事典風にさまざまな事柄を類別して集めた書物、いわゆる類書が多數作られている。類書は一般に三國魏の劉邵らの奉勅撰になる『皇覽』がその起源とされる。張滌華氏の『類書流別』によれば、その後、晉南北朝時代を通じて十七種の類書が編まれているけれども、北魏の『修文殿御覽』の殘卷が一部見られる以外は、全て散佚して今日に傳わらない。そして現存する類書で最も早い時期のものは、隋の虞世南の撰と傳えられる『北堂書鈔』であろう。この書は原本の一部を闕いているようであるが、今本についてその分類を見れば次のごとくである。

帝王部、后妃部、政府部、刑法部、封爵部、設官部、禮儀部、藝文部、樂部、武功部、衣冠部、饗飾部、服飾部、舟部、車部、酒食部、天部、歲時部、地部

各部のもとには、たとえば地部のもとに地、丘、陵、岡などが並ぶように、各子目が列擧されるのであるが、ここではそれは省略する。この『北堂書鈔』に續く類書が、初唐期、歐陽詢らが高祖李淵の勅命をうけて編んだ『藝文類聚』一百卷である。『藝文類聚』の項目分類は『北堂書鈔』に比べてはるかに詳細になっており、全體が四十六部からなる。これも次に各部の名稱を示しておこう。

天部、歲時部、地部、州部、郡部、山部、水部、符命部、帝王部、后妃部、儲官部、人部、禮部、樂部、職官部、封爵部、治政部、刑法部、雜文部、武部、軍器部、居處部、產業部、衣冠部、饗飾部、服飾部、舟車部、食物部、雜器物部、巧藝部、方術部、內典部、靈異部、火部、藥香草部、寶玉部、百穀部、布帛部、菓

部、木部、鳥部、獸部、鱗介部、虫豸部、祥瑞部、炎異部

『藝文類聚』には、『北堂書鈔』の場合と同様に、各部のもとに子目
が示される。たとえば天部を例に取り上げるならば、

天、日、月、星、雲、風、雪、雨、露、雷、電、霧、虹

のごとくである。そしてこのような子目の總數は全體で七二七項目に及ぶ。『藝文類聚』は、そもそもが歴代の典籍、作品に現れた事項と、文學作品中におけるその具體的な使用例を集大成した性格のものであるから、ここに取り上げられた七二七項目は、歴代典籍、作品中のキーワードの總數と考えてよい。従って『藝文類聚』は、そうしたキーワードの性格を持つ事項を内容上から四十六部に分類してみたわけである。また六朝から比較的近い時期の唐代には、これ以外にも、たとえば徐堅の『初學記』のように、『藝文類聚』の體例にさらに「事對」の一項を加えて詩文制作のための實用書性格を加味した類書が作られているが、『初學記』の分類は全體が二十四部になっていて、『藝文類聚』に比べればやや分類が粗いものの、大筋ではさしたる違いは見られない。

隋代から唐代にかけての代表的な類書がほぼ似かよった分類を立てているとなるならば、その分類には、當時考えられた全體的な事象に對し、當時の人々がほぼ共通に抱いていた類別意識の枠組が示されていることになるだろう。そこでまた對句の問題に立ち返ってみると、「的名對」や「異類對」における同類の認識も、類書の分類と密接に關っている可能性があると考えられる。

もっとも類書は、その性格からして、動詞、形容詞、副詞などい
わゆる虚字を對象にはしない。従って對句二句間における語の對應を類書に照らし合せて見る場合、實字の名詞のみを見ることになるわけ

であるが、ここでは試みに「風」を取り上げてみることにしよう。
「風」は、六朝詩人が好んで取り上げる素材だからである。

そこで鮑照の「風」の検討に入る前に、まずは陸機、謝靈運の場合から見ることにする。その理由は、六朝對句形成史の上で重要な位置を占めるこの二人の詩人との比較を通して、鮑照の特色を明らかにするために他ならない。まず陸機の全詩句中における「風」の使用例は、四十七例ある。それらは全てが他の事物と對應する形で用いられているわけではなく、散句の中に明いられているものもあるから、對句表現に限っていうと、當然その數は減少する。陸機の場合、「風」が對句表現の中で用いられていると考えられるのは、全用例のほぼ半數に當る二十數例である。なおここでいう對句表現には、前に述べたように、句全體としては不十分な對であっても、部分的に對偶意識の感じられるものがあれば、それも中に含んでいることを断っておかなければならない。これは以下の場合も同様であるが、あるいは見方によつては意見の分れるものがあるかも知れない。次に陸機の「風」が對應して用いられている語と、その用例數を示してみよう。

雲	森	雨	雷	景	晷	時	川	岸	華	獸	蟬
9	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1

この他に、「涼風」と連語になった形で「隆暑」と對應するもの、「清風」と連語になった形で「瑰璋」と對應するものもある。

陸機の例を一旦見て氣付くのは、「雲」が「風」と對應する概念の中で突出して多く明いられているという事實である。「雲」はいうまでもなく類書の分類では「風」とともに「天」部に屬する。「風」が「雲」と強く結びつくのは陸機に限ったことではなく、一般の傾向な

のであって、後に見る謝靈運、鮑照の場合も事情は同様である。「雲」を動きのあるものとして描寫するには「風」の存在が必要であつたらうし、また「風」が一般に聽覺でとらえられるのに對し、「雲」は視覺でとらえられるものであるところから、兩者の對比が均衡のとれた對偶表現として好まれたのだらうか。

「雲」以外の例は、ほとんどが散發的なものばかりである。しかしその散發的な例からも一つの傾向が讀み取れるのであって、それは「森」「雨」「雷」「景」「晷」などといわゆる「天」の範疇に屬するものが見立つということである。これに「雲」の九例を加えるならば、陸機の「風」と對應する語の大半は、やはり「天」の範疇に屬するもので占められることになる。前に、最も基本的な對句において對比される二つの概念を包み込む椀が類書の分類の椀に沿うであらうと考えたことの妥當性が、この陸機の例によって確められるであらう。

次に見るのは、謝靈運の場合である。謝靈運詩における「風」の全用例は、三十六例であるが、「風徽」のような自然現象でない「風」を除き、また散句中の「風」も除いて、對句表現に限って「風」に對應しているものを見るならば、これも二十數例が擧げられる。

雲	霜	雪	露	日	光	陰	夜	水	岸	鳥
6	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1

この他、陸機の場合と同様に、連語として初めて對應關係をなすと考えられるものに、「風波」「故山」「風潮」「客遊」「風波」「洲渚」、また佛典の『維摩經』を典故とする特殊な例ではあるが、「風電」「夢幻」のごときものもある。

謝靈運を陸機の場合と比べてみると、やはり「雲」が最も多い點、

「天」の範疇に屬するものが大半を占める點など、事情はよく似通つているといえるだらう。謝靈運の對句表現は、距離感の大きさに一つの特徴があるとされるのであるが、こと「風」の對應關係のみでいえば、陸機とさほど變るところはないようである。

さて次はいよいよ鮑照の場合である。鮑照の「風」の使明例は陸機、謝靈運に比べて壓倒的に多い。これは作品數そのものが鮑照の場合には他の二人に比べて多いから、當然のことともいえようが、ともかくも鮑照の全詩句中での「風」の使用例は實に九十五例の多數に上る。そのうち對句表現の中で用いられているものは約六十例あり、前と同様に「風」と對應して用いられる語とその使用數を示せば、次のごとくである。

露	雲	雪	霧	霜	日	天	景	霽	晷	響	寒
9	5	4	4	3	4	1	2	1	1	1	1
1	3	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
涼	塵	山	鳥	江	流	波	浪	水	道	鼓	帆
1	3	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
裝	蘭	葩	蓬	木	羅	蠅					
1	1	1	1	1	1	1					

さらにこれら以外に連語の形で對應するものを擧げれば、「疾風」「沙磧」「風聲」「五了」「風景」「闐闐」「秋風」「寒緯」などがある。

この鮑照の例を陸機、謝靈運の場合と比べてみると、明瞭な相違點がいくつか指摘できる。まずその一つは、陸機、謝靈運において目立

つていた「雲」への一點集中がなくなり、他のものへの分散化が進んでいることである。このことは、從來ややもすると「風」と「雲」とを對比することが常套化する嫌いがあったのに對し、鮑照がより變化に富んだ對句表現を求めようとした姿勢の現れと見る事ができるであらう。鮑照は用語、措辭など詩の表現一般について陳腐さを避け、新奇さを追求した詩人であったが、對句表現についても確實にその傾向が窺えるようである。

そして陸機、謝靈運の場合は、謝靈運にわずか一例のみ見られた「露」が、鮑照では「雲」を凌ぐ數で用いられているのであるが、次にその具體例を一つ見てみよう。

歸華先委露
別葉早辭風

歸華は先づ露に委し
別葉は早に風に辭す

〔鮑氏集〕卷七「既月城西門廡中」

これは『文選』に採られる詩の句であり、李善は「言ふところは歸華は先づ委して露に墮され、別葉は早に辭して風に隕さる。華落ちて本に向ふが故に歸華と曰ひ、葉下りて枝を離るが故に別葉と曰ふ。」と説く。すなわち、露にうたれた花がまず根本に向つて歸り落ち、風に吹かれた葉が早くも枝に別れを告げて飛び去っていくことをうたうのであるが、語の對應を見れば、「露」「風」の對應のみならず、「華」「葉」の對應もよく均衡がとれているし、さらには動詞の「歸」「別」、「委」「辭」の對應にもよく計算された工夫のほどが窺える。この二句は語法的に語の對應が完璧であるばかりか、先に○●で示したように平仄までもが見事に整っている。まさに律詩の對句を先取りした感のある二句なのである。

陸機、謝靈運の場合と比較して氣付かせられる鮑照の第二の特色

は、「風」と對應して明いられている語の概念が極めて廣範圍に亘っている點である。先に掲げた各語は、『藝文類聚』の部の順序にほぼ合わせる形で配列したのであるが、各語が所屬する部の名稱でいうならば、「天」部はむろんのこと、「歲時」(「寒」)、「地」(「塵」)、「山」(「山」)、「水」(「江」)「水」(「居處」)「道」(「儀飾」)「鼓」(「藥香草」)「蘭」(「蓬」)「布帛」(「羅」)「木」(「木」)などの各部に關つてゐる。陸機、謝靈運の場合も、「風」と對應して用いられていた語は、決して全てが「天」部の範圍内に収まるわけではなく、他の部に亘るものも確かにあった。しかし鮑照の場合に見られるこの廣がりは、格別というべきであつて、その原因は單にサンプル數の量の問題のみに歸することはできない筈である。表現がある固定化した枠内に閉じ込めることを避け、多様な表現の可能性を追求しようとした鮑照の作詩態度こそが、對句表現における對應概念に格別の廣がりをもたらす結果を生んだと考えるべきだらう。そしてこの對句表現の對應概念に見られる幅の廣がりこそが、對句二句間に大きな距離感を感じさせることに繋がつていくのである。次にまたその具體例を擧げてみよう。

木落江渡寒
雁還風送秋

木落ちて江寒を渡し
雁還りて風秋を送る

〔鮑氏集〕卷七「登黃鶴磯」

これは詩の冒頭の二句であり、この詩を採録する沈德潛の『古詩源』に、「語を出すこと蒼堅にして、發端力有り」と評される。まず詩句のイメージを大きく規定することになる實字の部分のみを取り上げてみると、この二句には「木」「雁」、「江」「風」、「寒」「秋」の三組の對比が見られる。「江」と「風」が『藝文類聚』で所屬の部を異にするのは前に見た通りであるが、「木」と「雁」も『藝文類聚』で

は、それぞれ「木」部、「鳥」部と部を異にする。「寒」と「秋」は、實は『藝文類聚』ではともに「歲時」部に屬するものなのであるが、同じ部とはいえ、「寒」は本来、形容詞であるから、四季の「秋」とはおのずから性格を異にする。このように實字のそれぞれの對比には明瞭に距離が認められるのであって、二句はまさしく『文鏡秘府論』でいう「異類對」に相當するものと考えられる。

しかし二句に距離があるということは、無縁なものが並立しているという意味ではむろんない。「木落」すなわち木の葉が散り落ちるのと、「雁還」すなわち雁が南に歸るのは、ともに秋の象徴的な風景である點に共通するものがある。また「江渡寒」と「風送秋」の部分についても、長江とその上を渡ってくる風がもたらす秋の寒氣がうたわれているのであって、意味的な統合には十分な配慮がなされている。二句はこのように統一性を確保しながら、しかもそれぞれの一句のみでは到底果し得なかつた秋の恠しくも嚴しい寥圍氣をかもし出すことに成功している點で、文學表現として對句が持つ役割をよく果していると思われるのである。

さらにこの二句は、形式の點から見ると、語法面で對應する語の關係が整っていることほかに、音聲面でも注目すべきことがある。それは「木落」と「雁還」が疊韻語と双聲語の對比で構成されているということである。「木落」は、ともに韻尾に入聲のK音を持つ疊韻語である。「雁還」は、『韻鏡』ではそれぞれ「疑母」「匣母」と異なる聲母に屬することになるが、日本漢字音の吳音がそれぞれ「ゲン」「メン」であるところから想像すると、双聲の關係と見ることがができる。對句における双聲、疊韻語の對比は、すでに陸機、謝靈運ららしばしば採用しているものではあるが、彼らの用いるのが多く擬聲、

擬態語の類であるのに對し、鮑照のこの例はそうした類の語でない點が注目される。そして「異類對」には、双聲、疊韻語を對比させることかとも一つの傾向としてあつたらしい。それは他でもない『文鏡秘府論』が「異類對」の項で「或いは双聲を以て疊韻に酬へ、或いは双擬にして廻文に對す」と述べるからである。ところが『文鏡秘府論』はこれについて具體的な例句を示さず、また説明もこれのみであるから、詳細はよく分らない。あるいは鮑照のこの例などを用いるものであつたらうか。しかしいづれにせよ、音聲面でのこうした工夫も二句に統合性を持たせようとするためのものであつたに相違ない。先の「甌月城西門廡中」詩の二句の場合と同様に、鮑照の對句表現には音聲面での工夫が認められることを指摘しておきたい。

五

鮑照の對句表現は、前述のように、對應する語の概念の廣がり一つの特色が認められた。しかし、個々の對句はあくまでも作品の一部にしか過ぎないから、たとえ二句内で統一性が保たれていたとしても、あまりに距離感のある對句が一篇の作品中に連續して配置されることになると、どうしてもイメージが散漫になりがちであつて、作品全體としての流れを阻害する危険性をはらむことになる。その危険性を解消するためには、二句すなわち聯を一つの單位として、聯相互の關連に配慮を加えつつ、全體としての統一をはかることが要請されよう。では鮑照はその要請に對してどのように答えようとしたのか、そのことを検討するのがここでの課題である。

まずは次の詩を見てみよう。

過銅山掘黃精 銅山黃精を掘るに過る

- | | | |
|------|----------------|-------------------------------------------------------------------|
| I | 土昉園中經
水芝韜内策 | 土昉は中經に調 <small>なま</small> され
水芝は内策に韜 <small>と</small> まる |
| II | 寶餌緩童年
命藥駐衰曆 | 寶餌もて童年を緩 <small>ゆる</small> くし
命藥もて衰曆を駐 <small>とど</small> む |
| III | 矧蓄終古情
重拾煙霧迹 | 矧や終古の情を蓄 <small>たく</small> へ
重ねて煙霧の迹を拾 <small>ひろ</small> ふをや |
| IV | 羊角樓斷雲
楹口流隘石 | 羊角は斷雲を棲 <small>すま</small> ましめ
楹口は隘石に流る |
| V | 銅溪晝沈森
乳竇夜涓滴 | 銅溪は晝も沈森として
乳竇は夜も涓滴す |
| VI | 既類風門磴
復象天井壁 | 既に風門の磴に類し
復た天井の壁に象たり |
| VII | 蹀躞寒葉離
濃濃秋水積 | 蹀躞として寒葉離れ
濃濃として秋水積る |
| VIII | 松色隨野深
月露依草白 | 松色は野に隨ひて深く
月露は草に依りて白し |
| IX | 空守江海思
豈愧梁鄭客 | 空しく江海の思を守るも
豈に梁鄭の客に愧 <small>は</small> ぢんや |
| X | 得仁古無怨
順道今何惜 | 仁を得ては古より怨 <small>うら</small> む無し
道に順へば今何をか惜 <small>あ</small> まん |

〔鮑氏集〕卷五)

この詩は、恐らくは現在の江蘇省丹陽の銅山をうたったものと思われるが、鮑照のいつの時期の作であるかは明らかでない。

この詩は、實はI聯からX聯まで全ての聯が對句表現によつて構成されている。謝靈運以來、對句使用の頻度が急速に高まっていたとは

いえ、このような長篇の作品で全篇對句というのはやはり珍らしい。さらにここに用いられる對句には、III聯の「流水對」、VII聯の「賦體對」、IX聯の「互成對」などのような特殊な對が含まれていて、あたかも對句の展覽館を見る感がある。

さてこの作品の對句表現を見ると、どの聯も二句の對應する語がかなりの距離をもつて配されており、いわゆる「異類對」に屬するものがほとんどといつてよい。そうした意味においてこの作品は鮑照詩の典型と思われる。

では鮑照はこの作品において各聯相互の關連、さらには作品全體としての統一性にどのような配慮を加えているのだろうか。まず詩全體の構成としては、最初の三聯を抒情で起し、中間の五聯に銅山の景を置き、最後の二聯をまた抒情で締め括っていることは明らかである。そこで最初の抒情部から次の敘景部への轉換點に注目してみると、ここにはすでに清の聞人俊の『古詩箋』五言詩、卷八に次のような指摘がある。

按ずるに楹口は、澗の淺きを喩ふるなり。又た羊角の峰は高ければ、雲は斷たれんとして其の棲を見んことを冀ふ、楹口の水は小なれば、石は當に隘せまむべきも其の流れを通ぜんことを願ふ。以て年命の長からざるに喩へ、大藥を得て、或いは以て終古の情を慰むべきを庶あふなり。(按楹口喩澗之淺也、又羊角峯高、雲欲斷而冀見其棲、楹口水小、石當隘而願通其流、以喩年命不長、庶得大藥、或可以慰終古之情也)

IV聯で、今にも絶えなればかりの雲が必死で高峰に留まろうとし、小さな谷川の水が岩の間を懸命に流れようとすると、とうたわれるのは、人生のはかなさを喩えるものであつて、それがIII聯でうたわれる

「終古情」、すなわち永年の生を願う人間の心と連關している、というのが、聞人後のいわんとする主旨である。これは要するに、敝景部の冒頭に前の抒情部との繋がりを持たせるための表現が工夫されているということである。あながち穿ちすぎた説とはいえないであろう。

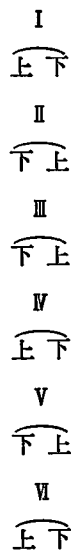
次に中間五聯の敝景部の構成に注目してみると、ここにも鮑照一流の工夫のほどが窺える。まずⅤ聯前句「羊角」の句は、前に觸れたように山の景であり、それに對する後句「楹口」の句は谷川の景である。そして續くⅥ聯では、前句「銅溪」の句が前聯後句の「楹口」の句を承ける形で谷川の景をうたい、これに對應する後句「乳竇」の句は再び山の景で應じて行く。さらにⅦ聯に移ると、前句「既類」の句では、「風門」とは南方廣東省の風門山のことであるから、前聯後句の山の景を承ける形になり、對應する後句「復象」の句の場合は、「天井」とは北方山西省にあった谷間の關所の名であるから、また再び谷川を描くことで前句「既類」の句に應じていることになる。これを分りやすくいうならば、Ⅴ聯からⅦ聯にかけては、視點が「山」―「谷」―「谷」―「山」―「山」―「谷」の順に置かれているということである。ここには明らかに各聯を有機的に結びつけようとする配慮が感じられる。

そして残りの聯についても一通り見ておくならば、Ⅶ聯においてはこれまでと調子が變わり、比較的穩やかな景が取り上げられるのであるが、「山」と「谷」への視點の面から見ると、今度はⅧ聯とは并行動の關係で、「山」「谷」「山」「谷」の形をとって展開する。またⅧ聯においては、對象の風景も、その描寫もさらに穩やかなものとなつて敝景が收束し、最後二聯の抒情部へと流れて行くのである。こうして詩は、各聯相互の結びつきに十分な配慮がなされることによって、内

鮑照の對句表現めぐる一考察

容の淀みない展開が保證され、全體としても計算された緻密な構成に支えられて、統一性のとれた一篇になっているといえよう。

ところで「過銅山掘黃精」詩で鮑照が行ったさまざまな工夫のうち、最も注意すべきものはⅤ聯からⅦ聯にかけての部分に見られた、視點を聯の内部で交替させながらそれぞれの聯を連鎖式に繋いで行く手法である。鮑照はこの詩においてばかりではなく、他の詩においても好んでこの手法を用いている。實は前に見た「登廬山」詩もこの手法が用いられている典型的な例なのであって、その構造を示せば次のごとくである。



「下」は視點が下方に向つてゐること、「上」は視點が上方に向つてゐることの意味である。視點を上下に交替させながら連鎖式に繋ぐ手法が、ここでもⅠ、Ⅱ聯の間、そしてⅢ聯からⅦ聯にかけての部分に採られている。

以上の例はいずれも景の描寫の場合であるが、景の描寫以外にも次のような例がある。

- Ⅴ 擾擾遊宦子 擾擾たり遊宦の子
- Ⅵ 營營市井人 營營たり市井の人
- Ⅶ 懷金近從利 金を懷きて近く利に従ひ
- 無劍遠辭親 劍を無して遠く親を辭す

ここで「劍を撫す」のは明らかに「遊宦の子」の行爲であり、「金を懷く」のは「市井の人」の行爲であるから、四句を圖式化するならば、A B | B A の關係である。

- IV (兩説窮舌端 兩説もて舌端を窮め
五車摧筆鋒 五車もて筆鋒を摧く)
- V (羞嘗白壁脱 白壁の脱に當るを羞じ
恥受聊城功 聊城の功を受くるを恥す)

〔鮑氏集〕卷四「擬古八首」其二

これは劉勰のいう「事對」に相當するもので、典故を含んだ二聯の對句である。「兩説」は、『史記』に見える魯仲連の二度の論説をい、また「聊城」の地を攻略した功績による褒賞を拒否したのも同じく『史記』に見える魯仲連の行爲であるから、この「兩説」「聊城」の二句が間に二句を隔てて結びつく。そして「五車」の書を誇る惠施は莊子との關りで知られ、「白壁の脱」を拒否したのは『韓詩外傳』に見える莊子の行爲であるから、中間の二句が結びつく。そうするとこの四句も圖式化するならば、A B—B Aの關係が成り立つことになる。

錢鍾書氏が『管錐編』において指摘されるところによれば、複數の對句をこのようにA B—B Aの形で組み立てて行くのは、古く『詩經』や『史記』からすでに見える修辭法であつたとされる。錢鍾書氏はさらに六朝詩の例として謝靈運の「登池上樓」詩に見える「潛虬媚幽姿、飛鴻響遠音、薄霄愧雲浮、棲川慚淵沈」を挙げられるのであるが、鮑照の場合、この修辭法はあるいは謝靈運に學ぶところがあつたのかも知れない。

しかし、鮑照ほどにこの修辭法を活用した詩人は、他になかったのではなからうか。殊に前に見た「過銅山掘黃精」詩や「登廬山」詩のようにA B—B A—A Bと連続してこの技法を用いているものは、他に類例を見出すのが難しからう。鮑照はこの技法を積極的に取り入れ

ることによって、個々の對句表現が一篇の作品の中で他の聯から切り離されたように孤立してしまうのを防ぎ、聯相互を有機的に結びつけるのに成功している。そして、鮑照が對句表現においてそれぞれの聯を連關させるべく行った工夫は、この技法を取り入れたことばかりではなく他にもある。

次の例を見てみよう。

- I 始見西南樓 始めは西南の樓に見れ
織織如玉鈎 織織として玉鈎の如し
- II 未映東北堦 末に東北の堦に映じ
娟娟似娥眉 娟娟として娥眉に似たり
- III 娥眉蔽珠櫺 娥眉は珠櫺に蔽はれ
玉鈎隔瑣窗 玉鈎は瑣窓に隔てらる

〔鮑氏集〕卷七「甞月城西門廊中」

これは詩の冒頭の三聯で、三日月の様子を描寫したものである。こに見える對句表現はかなり複雑になっているので次に分りやすい形に置き換えてみる。

- (1) 始見西南樓 (2) 織織如玉鈎 (5) 娥眉蔽珠櫺
- (3) 未映東北堦 (4) 娟娟似娥眉 (6) 玉鈎隔瑣窓

(2)(4)(6)句の部分は、前に見たA B—B Aの形である。しかもここには、前に見たA B—B Aの形に「玉鈎」「娥眉」の語を繰り返し用いる工夫が加えられているところに特色がある。

そして(1)句から(4)句にかけての形が、いわゆる「隔句對」である。「隔句對」については、『文鏡秘府論』の「二十九種對」にすでに「第二、隔句對」として採り上げられており、「第一句と第三句と對し、第三句と第四句と對す、此くの如きの類を名づけて隔句對と爲す」と

説明される。このような「隔句對」の形式自體はこれも歴史が古く、『詩經』の中にはいくらかこの形がある。しかし後世になると、駢文を主とする散文や賦の作品においては比較的容易にこの形を見出すことができるもの、こと詩に關していえば、「隔句對」が用いられる例は極めて稀である。たとえば王力氏の『漢語詩律學』第十五節「對仗的講究和避忌」の項を見ても、「隔句對」の例は一例しかない。王力氏は唐詩を廣く調査されたにも拘らず、白居易の一例しか見出せなかつたと自ら述べておられるくらいであるから、詩の「隔句對」がいかに少ないかが想像できるだろう。しかし詩の使用例が他に全く求められないわけではなく、『文鏡秘府論』の「隔句對」の項には例句が五例掲げられている。因みにこの五例中の一例が鮑照のこの「甌月城西門廓中」詩の四句であつて、他の四例は作者、詩題ともに未詳のものばかりである。

次に鮑照の「隔句對」の例をもう一つ挙げておこう。

- (5) 始隨張校尉——(6) 占募到河源
(7) 後逐李輕車——(8) 追虜窮塞垣

〔鮑氏集〕卷三「代東武吟」

「張校尉」は、漢の武帝の時、大將軍衛青の校尉として「河源」の地で匈奴を撃つた張騫、「李輕車」は、同じく武帝の時、輕車將軍として「塞垣」の地で匈奴の右賢王を撃つた李蔡を指す。これも四句が一まとまりとなつて、(5)句が(7)句に對應し、(6)句が(8)句に對應する。

「隔句對」が『詩經』には頻出しながらも、後世、詩の世界にあまり取り入れられることがなかつたその要因は、韻文においては『楚辭』によつて二句對がほぼ定着し、さらに漢代に入つて五言詩が登場すると、二句十言が一單位としてまとまる傾向が強まつたことによる

ところが大きかつたろう。しかし鮑照は、數こそ僅かであるけれども、確かにこの「隔句對」を詩に取り入れている。そして鮑照にとつて「隔句對」を採用することの意味は、五言詩の對句表現における二句十言の壁を切り崩して、また新たな表現の可能性を追求するための一手段であつたと考えられる。

さて以上述べてきたことを要約すると、鮑照の對句は、六朝期のそれまでの詩人に比べて、對句二句間の距離、すなわち二句の對應する語の概念の幅が廣がり認められ、しかもその對句は作品全體の中で決して孤立することなく、作品全體としての統一性に十分な配慮がなされているということである。鮑照の對句については、これまでも沈德潛が「清にして幽なり、謝公（靈運）の詩中に此の一種無し、此れ唐人の先聲なり」といひ、王王秋が「明遠（鮑照の字）の對句は多く是れ律中の佳聯なり」といふように、唐の律詩の表現に通ずるとの指摘がある。唐の律詩の對句は、形式面での整備と同時に、内容面でも詩的イメージの豊かさの點で文學的に優れるのだが、鮑照の對句も恐らくは前述の性格が與つて唐詩の持つそつとした文學性を逸早く獲得することになつたのだから。鮑照の對句は、六朝の對句形成史上、やはり見逃すことのできない重要な位置を占めると考えられるのである。

注(1) 松浦友久氏『中國詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）「中國古典詩における對偶の諸相」(一七) 要因の項を參照。

(2) 古田敬一氏『中國文學における對句と對句論』（風間書房、一九八二年）第一章「對句の原理」の項を參照。

(3) 對句の文學的效果を意識するのが「楚辭」に始まることは、高木正一氏『六朝における律詩の形成』（『日本中國學會報』第四、一九五二年、所收）や、花房英樹氏の『世界文學大系』『文選』（筑摩書房、一九六三年）

解説文などに指摘される。

(4) 高木氏前掲論文、参照。

(5) 高木氏前掲論文、ならびに古田氏前掲書の第四章、第一節「謝靈運の對句」を参照。

(6) 鮑照には、古詩、曹植、阮籍、陶潛らに模倣する作品がある。

(7) 梁の蕭子顯の『南齊書』「文學傳論」は、齊梁時代の文風を三派に分つが、その中の一つに鮑照の流がある。

(8) 松浦氏前掲書、(4)對句の項、参照。

(9) 王力氏『漢語詩律學』増訂本(上海教育出版社、一九七九年)による。

(10) 網祐次氏『中國中世文學研究—南齊永明時代を中心として—』(新樹社、一九六〇年)下篇、永明文學、第四章、永明文學の絳景、五、永明文學絳景の展開と其の由來、参照。

(11) 鮑照の作品は原則として『四部叢刊』所收の明毛斧季校宋本『鮑氏集』による。

(12) 松浦氏前掲書、(4)對句、参照。

(13) 興膳宏氏『弘法大師空海全集』第五卷(筑摩書房、一九八六年)の『文鏡秘府論』の解説、参照。なお『文鏡秘府論』の引用も同書による。

(14) 張滌華氏『類書流別』修訂本(商務印書館、一九八五年)「存佚第六」参照。

(15) 後藤秋正氏『陸機詩索引』(松雲堂書店、一九七六年)による。

(16) 小西昇氏『謝靈運詩索引』(中國書店、一九八一年)による。

(17) 山田英雄氏『鮑參軍集索引』(崑崙書房、一九八七年)による。

(18) ここには『藝文類聚』が子目に採り上げるもののみを挙げた。

(19) 錢鍾書氏『管錐篇』第一冊(中華書局、一九七九年)「毛詩正義」六「關雎」(4)、参照。

(20) 沈德潛『古詩源』卷十一所收の「過銅山掘黃精」詩評。

(21) 錢仲聯氏『鮑參軍集注』(上海古籍出版社、一九八〇年)に引かれる王王秋の鮑照「送從弟道秀別」詩評。